

同窓会

ニュース・レター

第21号

大阪大学
文学部
文学研究科
同窓会

2022年3月20日発行



春の豊中キャンパス

目次

同窓会会長 あいさつ.....P2	退職される先生方からのメッセージ.....P6
研究科長 あいさつ 「文学研究科から人文学研究科へ」.....P2	「教育ゆめ基金」のご報告.....P7
【特集】 村田路人「適塾と大阪大学」.....P3	研究室単位の同窓会 (比較文学研究室・アート・メディア論コース).....P7
黄夢鶴「日本のデジタル文学地図」.....P4	第11回大阪大学文学部・文学研究科 同窓会講座(2022年度)のご案内.....P8
同窓生からのメッセージ.....P5	事務局だより.....P8

〒560-8532 豊中市待兼山町1-5 大阪大学文学部・文学研究科同窓会

URL

<https://www.let.osaka-u.ac.jp/dousou/>

E-mail

dousokai@let.osaka-u.ac.jp

同窓会会長 あいさつ

玉井 暉

同窓会は、今年度も、コロナ禍に翻弄され、本来の活動に自爾態勢を取らざるを得なかったのは、まことに残念でした。そのなかであつて、この三月には、三人の先生がめでたくご定年を迎えられ、去つて行かれる。送別をお祝いする各種のイベントは是非とも例年どおり開いてほしいと念願してはいますが、あるいは何らかの制約が求められることもあるかもしれないと思つと、心が痛みます。文学部・文学研究科の発展と充実のために長年にわたつてご尽力されたことに心より感謝を申し上げます。

今春、文学部を卒業され、また文学研究科を修了される学生の皆さんには、それぞれ選ばれた道において大いに活躍され、また一層のご研鑽を積まれますよう、祝意をこめて祈念いたします。そして卒業・修了の後は、大阪大学文学部・文学研究科同窓会の会員として、私たちの同窓会のためにご助力いただければありがたいと願っています。すべてにコロナ禍のせいにするわけではありませんが、精神的にも肉体的にも閉塞状況を余儀なくさせられるなかにあつて、私はイギリスの一つの詩を思い出しました。それは、「いとうるわしい木、桜は、今」という、ケンブリッジ大学で古典文学の教授でもあつた学匠詩人A・E・ハウスマンの短い詩です。ハウスマンは、日本では、『シユロプシアの若者』（二八九六年）の詩人として知られていますが、この詩は、その詩集のなかに含まれている一篇です。今、森の乗馬道では、桜が、イースターに身にまとう白い服装のように、枝いっばいに花をつけて咲いている。季節は春四月の初旬です。この詩の主人公である若者は、この満開の桜を、せびとも、今、見に行きたくと願っています。そのわけを、若者は次のように語ります。最後の二連を引用します。

我が定命七十のうち
二十はすでに戻るよしなく、
七十の春から二十を引けば
もはや残るは五十のみ。

花の盛りを眺めるには
五十の春は余りに短い。
それゆえ私は森へと向かう、
雪にもまがう桜を見よう。

訳は、私の恩師、藤井治彦先生のものをお借りしました。若者は、今、満開の桜を見にゆこうよと呼びかけています。なぜなら、自分は今二十歳であるので、人に定められた命である七十年のうち、すでに二十年を使つてしまつた。あと五十年しか残つていない。すると桜の花は、一年に一度、春にしか見られないから、桜を見ることのできる機会は五十回しかないことになるではないか。だから、真つ白な花をつけて美しく咲いている桜は、今、見ておかねばならないのだと。この詩に登場する若者は、二十歳で人の一生を考え、命の短さに想いを馳せるとは、少し老成しているのではない

か、あるいは若者特有の突つ張つた思い上がりがあるのではないかと感じられますが、この詩に謳われている満開の桜を想像しますと、籠りがちな生活をおくっている私たちの昨今の日常にあつては、いささか羨ましくもあります。イギリスの桜は、私の乏しい経験から言つても、葉は一枚も付けず、枝や幹の全体を鮮やかなピンクの花だけで覆つて咲く日本の桜と比べると、やや劣つた印象を与えますが、それでも美しい花であることに違いはありません。今春こそ、文学部の本館の前庭に立つている桜の花をぜひとも観賞したいものだと思つた次第です。

ところで、この詩は、現実の世界に咲いている桜の「花の盛り」を見逃すなど訴えています。この「花の盛り」を比喩的に読むことが可能です。自分にとって大切なもの、貴重なものを表す隠喩とみなすことができるでしょう。欧米の文学に見られるモチーフ「カルペ・デイム」(その日の花を摘め)を変奏した詩の系譜に属していると考えられますが、軽薄な快楽主義の趣意を読み込む必要はないでしょう。花の盛りは短く、五十の春を生きたとしても、何度かこの花の盛りを手に入れたり経験したりすることができないかもしれない。それゆえ、今という時を大切にしようよと示唆しているように読めます。「花の盛り」の意味するものは、私たち各人によつてさまざまですが、コロナ禍のなかにあつて、今、自分にとって何が大切かを考え、それを見つつけ、そして充実した日々をおくることが教えられたように思つたのです。今年度、文学部・文学研究科同窓会は、なんとか工夫をして、可能な範囲で充実した同窓会活動を行いたいものだと願っています。会員の皆様のご助力・ご協力をどうかよろしくお願い申し上げます。



玉井 暉 (たまい、あきら)
1946年生まれ。阪大文学部英文学専攻を卒業。同大学院修士課程修了。博士(文学)。阪大文学部助教授、和歌山大学助教授を経て、阪大文学部助教授(英米文学)として勤務。その現職は、大阪大学助教授、大阪大学文学部助教授(英米文学)として勤務。専門は、日本文学、比較文学、批評理論。

文学研究科から人文学研究科へ 三谷 研爾

学問を「文系」「理系」に二分するのが適切かどうかは議論のあるところですが、いくつかの分野に大別できるのは間違いないと思います。最近、大阪大学では「医歯薬・生命系」「理工・情報系」「人文・社会科学系」の三系統を設けて、各系のなかで分野の壁を越えた取組みが生まれやすい環境を整えようという動きが強まっています。人文学の領域では、これまで文学研究科・人間科学研究科・言語文化研究科が鼎立してきたことはご存知のとおりです。それがこのほど、学際融合的な性格の強い人間科学研究科は別として、それ以外の二つをひとつにまとめる、あらたに「人文

学研究科」を開設することになりました。ここ三年近く検討を重ねたすえ、いよいよ二〇二二年四月に新研究科が発足するはこびです。

私たちの文学部の前身にあたる法文学部(旧制)が大学院とあわせて設置されたのは一九四八年、新制の大学院文学研究科がスタートしたのは一九五三年です。その七十余年の歴史のなかで最大の出来事は人間科学部の分離独立(一九七二)でした。しかし今回の変化はそれをはるかに上回る、根本的な大変革です。なぜなら文学研究科が幕を下ろし、言語文化研究科と一体になって新研究科を組織するわけですから。これまで言語文化研究科にあつたさまざまな研究分野をも包摂することで、文学と人文学の広大な領域をカバーする一大研究・教育拠点が生ずるのです。新しい「人文学研究科」は、人文学・芸術学・日本学・言語文化学・外国学という五つの専攻から構成され、約三〇〇名の教員が所属することになります。キャンパスも豊中と箕面にまたがります。箕面キャンパスは昨年四月、栗生間谷から新船場に移転したばかりで、地下鉄御堂筋線の延伸工事が完了すれば交通至便になります。しかし何より大きいのは、コロナ禍を受けてオンライン化が急進化したことで、授業だけでなく各種の会合もIT技術を積極的に活用するものになっていくでしょう。じつさいオンライン教育システムにより大学院共通科目やインターンシップ科目を充実させ、とりわけマスターコースの学生がそれぞれの専門分野での授業のほかに、幅広い人文学の知見を獲得できるよう工夫を凝らす予定です。

この研究科統合は大学院レベルのもので、学部レベルでは文学部がこれまでどおり存続します。研究室の枠組は大きく変わることもありませんが、研究室の地盤をより広げる新研究科に移行することで、意欲的な大学院生が多く集まり、それによって各研究室がいちだんと活気づいて学部学生にもよい影響を与えるようになるのが、私たち教員のいちばん願うところです。

現在、自然科学系の学部では、大学院も含め六年かけて専門分野の知識・技能を修得する学生が九割近くに達しています。人文系でも、従来の社会システムとそれを支えてきた通念が機能不全に陥りつつある現代にあつて、しっかりとした専門教育を通じてつねにより深く、かつしなやかに学び続ける思考態度を身につけた人こそが待ち望まれています。文学部と人文学研究科では、今後ともそうした世代の育成に全力で取り組んでいくつもりです。皆さまは、ぜひともご理解とご支援をたまわりますよう、心からお願い申し上げます。



三谷 研爾 (みたに、けんじ)
1961年生まれ。大阪大学大学院博士後期課程中退。博士(文学)。大阪府立大学総合学部・文学研究科に在任。専門は、中欧文化論。主な著書に『世紀転換期の空間と都市』(2010年)、『境界』(2014年)、『カカ・物語』(2014年)、『鳥影』など。

適塾は大阪大学の源流あるいは原点といわれます。しかし、それが果たして正しい見解なのか、また、どのような意味において大阪大学の源流あるいは原点なのかについて、説得的な説明がされることはありません。ここでは、日本近世史を専攻する立場から、この問題について解説を加えてみたいと思います。

緒方洪庵が大坂で医業を開業するとともに蘭学塾適塾を開いたのは天保九年（一八三八）のことです。大阪市中央区北浜に国の史跡・重要文化財としての適塾が現存していますが、これは二代目適塾で、洪庵が最初に開いた初代適塾は、そこから南へ約六〇〇メートル下ったところの津村東之町という町にありました。津村東之町は東西の道路である瓦町通りをまたぐ町でしたので、初代適塾は「瓦町の適塾」といわれます。それに対して、二代目適塾は当時過書町といった町にあったので、「過書町の適塾」といわれます。適塾が移転したのは弘化二年（一八四五）のことで、以後文久二年（一八六二）に幕府の要請により奥医師として江戸に赴任するまで、洪庵はここで塾生を指導します。洪庵が江戸に去ったあと、適塾は養子拙斎（四女八千代の夫）が塾生教育を引き継ぎ、明治十九年（一八八六）頃まで存続していました。

さて、洪庵は大坂において、医師・医学者・教育者として大きな足跡を残したのですが、特筆すべき事績として、牛痘種痘事業とコレラ対策をあげることができました。前者は有志とともに大坂に除痘館という種痘所を創設し、種痘活動を粘り強く続けたものです。後者は、安政五年（一八五八）のコレラ流行に際し、急遽『虎狼狼狗治準』というコレラ治療書を出版したことを指します。

牛痘種痘法は、一七九八年にイギリスのジェンナーが発表した天然痘予防法です。牛痘は牛が罹る病気ですが、ジェンナーは、この牛痘ウイルスを人に接種すると、天然痘に対する免疫が得られることを科学的に説明しました。この方法は極めて有効で安全性も高かったため、全世界に広まりました。日本では、嘉永二年（一八四九）六月にジャワのバタビアから牛痘苗（牛痘ワクチン）が長崎に届き、それを同地の子どもの間に接種したところ、成功（善感）しました。これを起点に、全国に牛痘種痘法が広まることとなります。

当時の牛痘種痘法は以下のようなものでした。子ども

の腕に牛痘苗を接種し、善感すると、接種部位が腫れ、そのうち痘疱が生じます。この痘疱の漿液を採取し、他の子どもの腕に接種します。善感すると、痘疱が生じるので、また次の子どもにその漿液を接種します。これを無限に繰り返すのです。この方法の難点は、次に接種する子どもを絶えず確保しておかねばならなかったことです。牛痘苗の植え継ぎが途切れることを絶苗といいますが、絶苗という事態になると、別のところから改めて牛痘苗を入手しなければなりません。当時の牛痘種痘活動の主要な課題は、絶苗をいかに避けるかということでした。

さて、長崎で牛痘種痘が成功した年（嘉永二年）の十月、長崎から京都の日野鼎哉という医師のもとに牛痘苗がもたらされ、同地でも牛痘種痘が成功します。日野はここで種痘所を開設し、種痘活動に乗り出しました。これを聞いた緒方洪庵や鼎哉の弟である日野葛民ら大坂在住の医師有志が、大坂で除痘館を開設する準備を始めます。大坂町人の協力を得て大坂古手町に除痘館が開設されたのは十一月上旬のことです。洪庵たちの素早い動きには驚かされます。

しかし、除痘館での洪庵たちの種痘活動は困難を極めました。牛痘苗が牛由来のワクチンであることから、種痘を受けると牛になるという噂や、種痘は子どもの体に害をもたらしという噂も広がり、接種対象となる子どもの確保に困難をきたすようになりました。洪庵たちは、時には米や銭を貸し子どもに与えて被接種者とし、絶苗を防いだこともありましたが、除痘館の開設と運営に携わった医師の中には、種痘活動から手を引く者も出てきました。洪庵たちは、除痘館開設にあたり、種痘活動は営利を目的としないことを申し合わせており、各医師が活動を継続させるには、よほどの覚悟が必要だったのです。

このような危機的状況が三、四年続きましたが、やがて牛痘種痘の有効性が広く世間に認識されるようになり、除痘館の活動は軌道に乗ります。しかし、そうなるのと、今度はろくに牛痘種痘法を学んでいない者が金儲けのために種痘を始めるようになりました。これは種痘を受ける子どもの健康のみならず、牛痘種痘法そのものの信頼性にもかかわることです、放置できない深刻な問題でした。

こうして、洪庵たちは、当時大坂を支配していた大坂町奉行所に、種痘所は除痘館一カ所のみに限ってほしいと再三にわたって嘆願を繰り返しました。そのねらいは、牛痘種痘法を確実に修得した者だけが種痘を行うようにすること、絶苗を防ぐことの二点でした。安政五年（一八五八）四月、大坂町奉行所はこの願いを受け入れ、

大坂の町々に町触を出しました。この町触では、種痘所は除痘館一カ所のみに限ることを命じるとともに、除痘館で行われている種痘は安全なものなので、積極的に種痘を受けるよう勧められています。

その後、慶応三年（一八六七）四月、開設以来民間施設であった除痘館は幕府の施設となり、種痘館と称するようになります。間もなく幕府は倒れますが、種痘館は明治三年（一八七〇）四月、前年十一月に明治新政府が建てた大阪府医学校病院の附属種痘館となります。この大阪府医学校病院は同五年九月に廃止され、その後の変遷がありますが、一応大阪大学医学部の源流と位置づけでもよいものです。

適塾の方は、前述のように明治十九年頃まで続きますが、最後まで私塾としての性格は変わりませんでした。このように見てくると、大阪大学の源流は、適塾というよりもむしろ除痘館の方に求められるといつてよいでしょう。

しかし、適塾と大阪大学はまったく無関係というわけではありません。適塾の生みの親は、いうまでもなく緒方洪庵です。一方、除痘館は大坂の有志の医師たちによって開設されましたが、そのリーダー的存在であったのは洪庵でした。洪庵から見れば、二人の息子のうち、適塾が兄、除痘館が弟といったところです。結局、適塾は大阪大学と直接的な系譜関係こそないものの、洪庵を通してつながりがあるということになります。

適塾と大阪大学との関係について述べてきました。実は、適塾が大阪大学の源流であるか否かは、それ自体たいた問題ではありません。大切なことは、適塾における学問探究の精神、あるいは洪庵たちが除痘館における牛痘種痘活動の中で示した、みずからの社会的責務に対する自覚とその実践などを学び、継承することであると思います。とりわけコロナ禍のもとにある現在、洪庵たちの牛痘種痘活動に思いを馳せることは意義深いことといえるでしょう。

プロフィール



村田路人（むらた・みちひと）
1955年生まれ。1996年から大阪大学大学院文学研究科日本史講座で助教授・教授を務め、2020年定年退職。現在、神戸女子大学文学部教授、大阪大学適塾記念センター特任教授、大阪大学名誉教授。専門は日本近世史。著書に『近世広域支配の研究』（大阪大学出版会、1995年）、『近世の淀川治水』（山川出版社、2009年）、『近世畿内近国支配論』（塙書房、2019年）などがある。2019年より同窓会副会長。

特集

日本のデジタル文学地図

黄夢鶴

「日本のデジタル文学地図」とは、歌枕や名所の地点をWEB日本地図に示し、そこに歌枕や名所の地理的・歴史的な概説と文学テキストを挙げ、テキストの原典画像にリンクを張って古典籍本文も確認できるデータベースです。現在はハイデルベルク大学（ドイツ）日本学科のユディット・アロカイ先生と本学文学研究科の飯倉洋一先生（日本文学）と中尾薫先生（演劇学）とのチームで構築されています。中尾先生のチームは謡曲用例の収集作業、飯倉先生のチームは謡曲以外の用例入力を担当しています。アロカイ先生のチームは収集した日本語データの英語訳をしています。筆者は本プロジェクトでリサーチアシスタントを担当し、歌枕・名所のイメージ形成に関わる和歌や物語などの用例データを収集しています。



図1 日本のデジタル文学地図ホームページ



図2 日本地図画面

次に「日本のデジタル文学地図」の使い方や内容、特徴について紹介します。

まず、「日本のデジタル文学地図」は<https://literary.maps.nijiac.jp/>というURLからアクセスできます。最初に出てくるのは上記の【図1】のページになります。真ん中の「閲覧する」というボタンをクリックすると、【図2】の地図画面に入ります。青いアイコンは各名所の位置を示しています。そして、各名所には「基本情報」・「地誌・歴史」・「和歌・漢詩・俳諧」・「物語・説話・絵図等」・「謡曲」の五項目を設けています。「基本情報」では、地名の漢字・ふりがな・ローマ字表記、旧国名、現在所在の都道府県、経緯度、歌枕としての意味・特徴・連想などの基本的な情報を示しています。「地誌・歴史」では、地名の地誌情報と歴史を提示しています。「和歌・漢詩・俳諧」「物語・説話・絵図等」「謡曲」という三つの項目では各ジャンルの代表的な作品における歌枕・名所の用例を掲載しています。現在、特に和歌や物語、謡曲などの用例があり、今後は絵図などの資料も加えられ

ます。
そして、「デジタル文学地図」の特徴として以下の点が挙げられます。

- (1) 日本地図に日本の歌枕・名所をマッピングすることで、長い歴史を持つ歌枕・名所を空間的・地理的に見て、日本文学への空間的アクセスの試みと言えます。
- (2) 地名の地理的・歴史的概説および日本の和歌や物語、謡曲などの代表的な作品の用例を示し、日本文学における歌枕・名所の歴史的、文化的、ポエティックな意味を提供しています。幅広い作品の用例を取り入れることで、ジャンルの境を越え、多方面から歌枕のイメージと魅力を伝えることができます。更に、歌枕・名所のイメージの生成と変容を研究することができ、日本古典文学・文化を学習する教育システムとしても用いられます。
- (3) WEBサイト上に日本語と英語をともに掲載し、多言語のデジタル文学地図を構築することにより、日本のみならず、世界の日本文学・日本文化の研究者および学生の研究・教育の発展を促進し、国際的な社会貢献を果たすことも考えられます。

(4) デジタル文学地図は現在まだ構築中であり、今後は図絵など多くの資料を取り入れる予定である。データベースの一層の充実と利便性の向上を図っており、可能性に満ちているものと言えます。

興味のある方はぜひ「日本のデジタル文学地図」のホームページに入って、見てみてください。みなさんに活用していただければ幸いです。

プロフィール



黄夢鶴 (こう・むこう)
1995年生まれ、中国出身。2018年4月文学研究科博士前期課程に入学。現在は博士後期課程2年在学中。専門は日本文学。特に中古・中世時代に成立した和歌と漢詩で構成された和漢兼作作品を中心に研究している。

同窓生からのメッセージ

第二の故郷、大阪

林 日佳理

私は2008年に地元の岐阜市を出て大阪大学文学部に入学してから、そのまま大学院に進み、2018年9月まで阪大に通いました。入学当初は大学院の存在すら知らなかった私ですが、学部の授業を受ける中でこのままここで勉強を続けたいと進学を決め、頑固に10年ほど居座りました。在学中には、大学や学部で提供される様々な制度の恩恵を受け、交換留学を経験したりいろいろな先生のTAをさせていただいたりしながら勉強を続けてきました。教育ゆめ基金にもお世話になり、学会への遠征費を援助していただいたこともありました。ありがとうございます。

修了後は、奇跡的に地元で大学教員の仕事に就くことができたが、予想以上に大変な仕事に奔走する日々です。現在所属する岐阜大学教育学部英語教育講座では、主に英語の先生になることを志す大学生と一緒に英語圏の文学を読んだり話し合ったりすると同時に、教員養成のための実習指導にも携わっています。大学で授業をする立場になり、あらためて自分が学生・院生時代に教えてもらった先生方のありがたさを



林 日佳理 (はやし・ひかり)
2012年大阪大学文学部英米文学・英語学専修を卒業。2015年大阪大学大学院博士前期課程英米文学専門分野を修了。2018年9月同博士後期課程を修了し、同年10月より岐阜大学教育学部英語教育講座助教。

身にしてみ感じます。教え方や教材などを参考にすれば、教育活動と並行して研究に取り組む原動力として、阪大にいたころの経験は大きな糧となっています。また今は岐阜県内の小・中学校を訪問する機会も多くあり、自身の子供の頃の姿や、そこから出て大阪で学ぼうと思った過去のことをよく思い出すようになりました。そのような中で、岐阜で教職を目指す今の若い学生たちに、これまでの自分の経験の中からなんとか役に立ちそうなものを、少しでも示してあげることができればいいなと思いつつ仕事をしています。

現在はコロナのため「第二の故郷」大阪になかなか帰れない状況ですが、大学・大学院時代に阪大に通えたことは、そこできしか出会い得ない人たちとの出会いがあり、私にとってもものすごく大切な10年半でした。ありがとうございます。これからも頑張ります。

自分の進路を決めた展覧会

藤原 禎恵

私は偶然受講した先生の授業で仏教美術に興味を持ち、美術史を専攻しました。勉強していくうちに美術史の面白さを知って大学院に進学し、いつか学芸員として働きたいとも思っていました。しかし、言うは易し、叶うは難し。先輩たちの偉大さを目の当たりにし、なかなか研究も思うようにはいかないが、素直に作品に向き合えない時期がありました。展覧会に作品を見に行っても、研究につながる糸口を何か見つけられない、と躍起になっていたのかもしれない。

そんな時、ある展覧会でひとりの男の子を見ました。大きな仏像を見上げて立ち尽くし、ポツリと「すげー！」と呟いていました。この小さな言葉とキラキラした男の子の表情に、ハッとしました。「そうだ、展覧会って面白いんだ。美術って楽しいんだ」と、自分が美術史に興味を持った原点を思い出させてくれた気がしました。

この出来事をきっかけに、改めて自分の進路を考えました。それまで、美術館や博物館で働くには学芸員しかないと何故か思い込んでいましたが、展覧会に関わるには他の色々な業種があることを、指導教官の先生に教えていただきました。そして、私は新聞社の事業部という部署で働いています。展覧会の企画や運営、広報などが主な仕事です。ひとつの展覧会が開幕するまでに、こんなにも長い時間がかかり、多くの人が関わっているということは、学生のころには思いもしてませんでした。そして、開幕してしまえば、あっという間に時間が過ぎていってしまうということも…。

振り返れば、自分の進路を決めたときはいつも、何かの展覧会がありました。美術史の専攻に進もうと思ったとき、大学院に進学して美術館の仕事に就きたいと思ったとき、そして今の会社への就職を目指したとき。私が進む道を選ばせてもらったように、たった一人でも、どこかで誰かの心に残る展覧会を作れるといいなと思いつつ、目の前の仕事に必死についていく毎日です(笑)



藤原 禎恵 (ふじわら・よしえ)
2002年 大阪大学文学部人文学科入学
2006年 同 卒業
大阪大学大学院文学研究科入学 (日本東洋美術史)
2008年 同 卒業
毎日新聞社入社
東京本社人事部、事業本部を経て、現在大阪事業本部で展覧会事業を主に担当

退職される先生方からのメッセージ

◆感謝

飯倉 洋一

着任当初自分がやろうと思っていたことは、一割もやれていない。もう少し研究書や論文を書いていたらと反省している。一方で、思ってもみないことをたくさんやることになった。そのほとんどが、大阪大学の教員でなければ回ってこなかった仕事だった。それらが、私の視野を広くし、学際的・国際的な交流を経験させ、研究と社会を繋ぐ意識を高めたといえる。そのいくつかについて語ってみたい。荒木浩先生、浅見洋二先生を引き継いで二〇〇五年度から三年間担当した、広域文化表現論講座。「テクストの生成と変容」というテーマを掲げ、お声がけした結果二十名を超える先生方のご参加を得た。二ヶ月に一度の研究会のたびに得られる知的昂揚。二〇〇五年度から研究科長となった柏木隆雄先生から「なんで僕を誘わんのや」と千里阪急ホテルでの懇親会で言われたときの嬉しさ。多忙の先生をお誘いする勇気がなかったのだ。早速翌年度から参加していただき研究会をリードしていただいた。

二〇〇五年度にはもうひとつの共同研究がはじまった。国文学研究資料館館長で阪大名譽教授の伊井春樹先生から阪大との研究連携のお誘いがあり、「忍頂寺文庫・小野文庫の研究」が提案された。上方洒落本を多く有し近世語の資料の宝庫でもあることから国語学の金水敏先生にも共同研究員になっていただけた。阪大OBに声を掛けて、以後数年にわたってこの共同研究を進め、附属図書館のご協力も得て目録を完成させることができた。とりあえず全点を目を通したことで、私のそれまでの研究とは全く無縁の近世歌謡の世界を知ることができた。

出原隆俊先生の後任として懐徳堂記念会の学内幹事となり、十数年仕事をさせていただいた。記念会百周年にあたっては寄付金を募るべくパナソニックや関西電力、東洋紡などを当時の研究科長の天野文雄先生らと回ったことも得がたい経験だった。百周年記念誌の座談会にはパナソニックに対応して下さった小川理子さん（ジャズピアニストでもある）をお呼びすることもできた。もはや紙幅もなくなった。他にも科内で開発したくずし字学習支援アプリが十四万を越えるダウンロード数を達成したり、京博で開催された上田秋成没後二百年展の事務局を務めたり、ハイデルベルク大学で四ヶ月教えたり、すべては大阪大学に来なければ経験できなかった。

何より私は、すばらしい同僚と学生たちに恵まれ、日々刺激を受けた。ただただ、この二十一年間の阪大教員生活に感謝している。



飯倉洋一(いいくわ・よういち)
九州大学大学院博士後期課程中退。九州大学助手、山形大学助教授、教授。専門は日本近世文学。とくに上田秋成を中心とする18世紀の文学。主な著書に「秋成考」(翰林書房、2005年)、「上田秋成一絆としての文芸」(大阪大学出版会、2012)、「アプリで学ぶくずし字」(編著。笠間書院、2017年)など。

◆さまざまな交流に感謝

金水 敏

私は一九九七年一月、大阪大学文学部助教授として着任(神戸大学文学部と併任)し、翌年四月より専任となりました。二四年余りを大阪大学で過ごしたことになります。この間、教員、事務職員、そして学生の皆様には、大変お世話になりました。心よりお礼を申し上げます。現在の私の研究や社会貢献の実績に繋がった重要な出来事は、概ねこの大阪大学で経験しました。まず、「役割語」研究の面では、九〇年代の後半から温めていた着想を思い切って阪大着任後の一九九九年の大学院の演習でテーマとして選び、学生に自由に発表してもらいました。その成果を二〇〇〇年に公開した論文で形にすることができました。その後、新しい日本語のシリズ発行を計画していた岩波書店の編集者の方から出版のお誘いを受けて二〇〇三年に出したのが「ヴァーチャル日本語 役割語の謎」という書籍です。また、役割語の研究の母体となったのが、実は修士論文からずっと継続して研究していた日本語の存在表現の歴史的变化で、これについては二〇〇六年にひびく書房から『日本語存在表現の歴史』として刊行し、私の学位申請論文となりました。(ついでに幸運なことに、同年の新村出賞受賞の対象となりました)。

研究面とは別に、二〇〇七・二〇一一年の四年間、コミニケーションデザイン・センターのセンター長を仰せつかり、それをきっかけとして社連携を目的とするCSDCプロジェクトを担当したり、京阪電車中之島駅にあるアートエリアB1というスペースを利用した各種カフェ・イベントを主催することになりました。また、二〇一六・二〇一七年には文学研究科長・文学部長に就任することとなりました。二〇一七三月の学位授与式で読んだ式辞をブログに掲載したところ、たまたまツイッターで取り上げられたりしました。それから「研究科長の夜」というトークイベントを企画し、理論物理学、生命科学、行動経済学の専門家の方や、小説家、宗教家、上方舞師範のみなさんをゲストにお呼びしたりしました。このように、大阪大学在学中に、研究面だけではなく、他領域の専門家の方々や地元商店街のみなさまとの交流など、さまざまに人脈が広がり、大変充実した日々を過ごすことができました。それも、大学や専門の枠に囚われない、文学研究科・文学部の自由な気風あつてのことと感じております。



金水敏(きんすい・とし)
1956年、大阪生まれ。東京大学人文科学研究所修士課程修了。博士(文学)。大阪女子大学文学部、神戸大学文学部教員等を経て、1997年に大阪大学文学部大学院文学研究科教授。2020年12月より日本学士院会員、大阪大学栄誉教授。専門分野は国語学。編著書に「ヴァーチャル日本語 役割語の謎」「日本語存在表現の歴史」「コロモ日本語アルカ? 異人のことばが生まれるとき」「役割語小辞典」等。

◆「研究者を目指して」留学、日本語の授業から感じたこと

鄭 聖汝

韓国での14年間の教職を辞して、中1の娘を連れて神戸大学研究生として来日したのは1994年9月であった。傍から見ると無謀とも言える37歳の大胆な決断であったかもしれないが、私にとっては大の流れるように不可逆的で自然な成り行きだった。諸々の事情で抑えられてきた知への憧れがあふれ出し、それが行動に結びついたのだ。1999年3月博士号取得(言語学)により研究者を目指した留学が実を結び、やっとスタート地点に立つことができた。その後JSPS外国人特別研究員を経て、幸運にも留学生専門教育担当講師として本学文学研究科に奉職でき、安定した環境の下でプロフェッショナルな研究者としての道が開かれた。46歳、結婚・子育てを経て、遅咲き研究者の出発であった。

2003年4月阪大に着任してから19年間(就任当時任期制限がなかったため、幸運なケースであった)、身に余るほど快適な環境で研究生生活を送ることができた。主な研究テーマとしては、「(一)使役とヴォイス(態)の関係」、「(二)他動性」、「(三)「体言化」が挙げられるが、「(一)」は単著(2006、くろしお出版)と紀要に数編の論文を纏めることができた。「(二)」は主として3回の科学研究費(基盤C)によるプロジェクトとして、現在も続行中で、「(三)」は本学「国際共同研究促進プログラム」による総額約1200万円の手厚いサポートのもと(米、ライス大学との共同研究として展開され、その成果は編著書(2021、阪大出版会)として公開された。研究に没頭できる良い学風・同僚・事務方を惜しまれなかった阪大および文学研究科の先輩・同僚との支えを惜しまなかった阪大および外国籍・女性・母親研究者の立場からは、国境・性別・家庭環境を超えた、特にこれからの若手研究者への標として、また阪大研究集団の一員として、幾ばくかの貢献ができたのなら、望外の喜びである。私に求められた授業は留学生を対象とした日本語教育であるが、中でも「論文作成法」は留学生だけでなく、日本人学生にも重要なものとして、少し触れておきたい。ここ約20年間の変化をコロナの前後に分けてみると、コロナ前は多くて2、3名程度の変化をコロナが受講し、それも学部4年生と院生が殆どで、法学部・経済学部など文学部以外の学生が主流だった。ところが、コロナ後、特に今年度の目立った特徴は文学部2年生が急増し、現在10名ほど出席し大変熱心であることである。受講理由を聞くと、レポートの書き方がわからず困っているとのことだった。日本人学生に広く開放された論文作成科目を積極的に開講すべき時期がきたのではないかと、実感している。



鄭聖汝(ちよん・そんよう)
1957年、韓国生まれ。1999年、神戸大学文化科学研究科(文化構造専攻)修了。学術博士。日本学術振興会外国人特別研究員を経て、2003年、大阪大学文学研究科に赴任。専門分野は言語学として「韓日使役構文の機能類型論研究」(2006年、くろしお出版)、編著書「体言化理論と言語分析」(2021年、大阪大学出版会)、論文「韓国語における疑問文の形成と体言化」(2020年、「言語研究」)など。

◆「教育ゆめ基金」のご報告◆

いつでも、お心のままにご寄付いただければ幸いです

文学部創立60周年(平成20年)の折に創設しました「教育ゆめ基金」は、文学部・文学研究科の教育活動を支援していただくための基金です。この基金は、人文学教育の国際化、学生の海外留学支援、留学生の支援、優秀な学生への奨学金等、もっぱら優秀な人材を育成するための教育助成を目的としています。2013年秋に大阪大学「未来基金」と窓口統合したことにより、いっそう多くの同窓生ならびに教職員の皆様よりご寄付いただき、2021年度の寄付金は総計41万円となりました。ご厚情に心よりお礼申し上げますとともに、今後ともご支援を賜りますようお願い申し上げます。
(文学研究科長 三谷 研爾)

2021年1月～2021年12月「教育ゆめ基金」寄付者リスト(敬称略・五十音順)

明石 勝久	越野 道子	玉井 暉	深田比加里	林 礼春
荒牧 典俊	小林 正人	中西 正博	深水香津子	和田 光弘
浦崎なぎさ	小松 洋一	南里 正之	藤田 隆則	
大野篤一郎	斎藤美美子	野田 育宏	宮川 文子	このほか、氏名掲載を希望されない方4名
川邨 明高	高嶋 藍	日野林俊彦	山田二三夫	



◆「教育ゆめ基金」の支出(見込)(2021年4月～2022年3月)

- 文学部海外留学支援制度奨学金 180,000円(2名) 合計360,000円
- 文学研究科大学院生海外調査等助成 250,000円(1名 海外) 108,600円(1名 見込 海外) 79,200円(1名 国内) 42,700円(1名 国内) 91,200円(1名 見込 国内) 合計571,700円
- その他 126,000円(1名) 総計 1,057,700円

文学部・文学研究科では、多くの研究室がそれぞれの同窓会活動を行っています。今回は、比較文学研究室とアート・メディア論コースを紹介します。

比較文学研究室案内

橋本 順光

比較文学研究室では、主にジャンルや言語を越境する物語について研究します。漫画も映画も対象です。ただ、どのように(意外な)先行作から作品が生まれ、転用されたのかを精読して調べるので、オーソドックスな文学研究とあまり変わらないと思っています。とはいえ専任教員一人がカバーできる範囲と単位はわずかです。なので学生には他専修の授業を積極的に受けるよう勧めています。文学環境論や英米文学に日本文学など、多くの先生方が暖かく受け入れ、かつ等しく指導して下さい、大変助かっています。理想は、語学力と読解力を基礎にして得意分野をおさめつつ、他流試合もこなせることです。これもどの学問でも一緒ではないでしょうか。もちろん調べる量は多くなります。教員は方法とテストケースを教えるだけで、何を選ぶか自分で決めて勉強し、熱量を共有しない受講生にその意義を説明しなければなりません(講義や論文演習では、レポートや論文の合評をいつも行なっています)。事前にその大変さとそれだけに得難い面白さを強調するせいか、研究室には勉強好きの読書家が集まるようです。よくお勧めの作品とその理由を書いてもらって紹介するのですが、本や映画の思いがけない側面に驚かされ、慌てて漫画を買うこともしばしばです。その延長で、年に二回、展覧会に出かけて展示や建築も含めた読みを披露しあう課外授業を行なってきました。来年には再開できるでしょうか。悩みの種は蔵書です。一部の漫画や本は処分できますが、入手困難な書籍や展覧会の図録はそうもいきません。総合図書館が架蔵してくれればとは限らないため、結局、研究室に置き続けるしかないのです。ただ所蔵館が少ない本があるせいか、よく閲覧希望の方がいらっしやいます。写真はそんな研究室の一角です。乏しい人員ゆえ貸出はしていないのですが、これぞというのがOPACにあれば研究室へご連絡ください。そしてできれば、その本の面白さと他にお勧めの作品も教えてください。また蔵書が増えることとなりますが、そんなふうには人や本が思いがけない形でつながり、広がっていく研究室を目指しています。



アート・メディア論コースの15年

永田 靖

2007年に大阪外国語大学との統合が行われ、文学研究科内に文化動態論専攻という修士課程が設置されることになった。この専攻は専門知識を生かして現代社会に広く活躍できる人材を育成することを目指していた。アート・メディア論コースは、この文化動態論専攻の一つとして設置され、既存の学問のディシプリンに縛られることなく、アートを軸に広く学際的にまた社会との接触を主眼にした研究教育を行うことを目的としていた。コース創設時には、大阪外国語学部から藤村昌昭先生(イタリア文学・思想)、市川明先生(ドイツ演劇)、三宅祥雄先生(フランス思想、映像論)の三人の先生に来て頂き、そこに西洋美術史の岡府寺司先生と演劇学の私に加わって、多彩な専門領域の横断的なコースが誕生した。この狭い専門領域にとらわれない姿勢が、現代の時代的な符號と触れあったのか、当初から毎年10名前後の院生を受け入れてきた。現役社会人や留学生が多いのも、このコースの特徴をよく反映していた。いきおい院生たちの研究対象も幅が広く、現代アートや映像、パフォーマンス・アートの研究はもとより、地域社会の芸術活動、美術館の運営手法、自治体の文化政策論、マス・メディア史やデジタル・メディアの研究まで多岐に及んでいるし、対象とする地域も日本に限らず、イタリアやドイツ、フランスをはじめ、中国、台湾、ベトナム、チベット、インドとグローバルな拡がりを持つ。教員全員が関わる講義「アート・メディア史」はそれぞれの専門領域の最新成果を教授する重要な科目だが、「アート・メディア修了演習」もまた、院生各自の研究を、全教員と全院生の前で発表する刺激に富んだものである。このようなコースの修了後にはやはりアート関係の仕事に就く院生が多かった。美術館や博物館の学芸員や劇場、各種ホールの制作業務、TV局や新聞社、広告代理店などから、公務員や教職も多い。同窓会の活動は特に行わないが、修了生同士での繋がりがいまでも活発で、各種のアート・イベントの連絡や取り組んでいる事業の案内などは全修了生のメーリング・リストに飛び込んで来る。何よりコースの年刊紀要『Art & Media』はすでに11号を数え、修了生たちのその後のアートについての論考が今でも掲載され続けている。このアート・メディア論コースも、次年度4月からは、新研究科創設に伴い、いよいよ博士後期課程を持つことになる。教員スタッフも徐々に入れ替わり、最後になった岡府寺先生と私は、次年度定年退職を迎える。創設から15年、多くの人材を世に送り出したアート・メディア論コースも次の新しい時代を迎えようとしている。



『Arts and Media Vol.10』文学研究科アートメディア論コース編、松本工房刊、2020 ©「松本工房」

◆第11回大阪大学文学部・文学研究科 同窓会講座（2022年度）ご案内

令和2年度より企画していましたが、COVID-19の感染状況を踏まえ、延期を重ねていましたが、令和4年度に、オンラインにて開催いたします。3年ぶりの同窓会講座開催となります。ぜひお誘いあわせの上ご参加ください。

2022年5月7日（土）13時30分～15時30分

「キャラクターで読み解く村上春樹」

●村上春樹の小説は、日本語のスピーチ・スタイルのさまざまなヴァリエーションを利用して、登場する人物を生き活きと際立たせています。講師が2000年以来研究してきた「役割語」の理論を援用し、村上春樹の小説のいくつかについて分析した結果をお話いたします。関連して、村上春樹作品を外国語に翻訳した例も併せて検討していきます。

※zoomによるオンライン開催

※講師：金水 敏 教授（大阪大学大学院文学研究科・国語学専門分野）2022年1月現在

※参加費：無料

※申し込み方法：お名前、出身研究室、卒業・修了年度 を明記の上、以下のいずれかによりお申し込みください。お申し込みいただいた方に、接続方法をメールでお送りいたします。

①大阪大学文学部・文学研究科同窓会のサイト <https://www.let.osaka-u.ac.jp/dousou/>

②メール dousoukai@let.osaka-u.ac.jp

なお、先着100名とさせていただきます。



事務局だより

●お知らせ

◇文学部・文学研究科 卒業生・修了生名簿（二〇一七年版）について
二〇一七年三月刊行の『大阪大学文学部・文学研究科卒業生・修了生名簿』ご購入を随時承っております。頒価（五千四百円・送料込）でお送りいたします。ただし名簿のご購入は同窓会会員の方に限定しておりますので、ご入会がお済みでない同窓生の方には入会手続きをお願いしております。あらかじめご了承ください。なお、新規に同窓会終身会費（一万円）をお支払いいただいた方のうち、希望される方に一冊呈呈しております。振込用紙通信欄に名簿希望の旨をお書き添え下さい。
◇ご購入希望の場合は以下の郵便振替口座に所定の金額をお振込み下さい。ご入金確認後、発送させていただきます。ご購入に際しご質問等ございましたら同窓会事務局まで遠慮なくお問い合わせ下さい。（現在、二〇二二年度版作成中）

◇同窓会へのご寄付について

同窓会では、寄付金（一口二千元）を受け付けております。二〇二二年度は、内藤裕子様にご支援を賜りました。誠にありがとうございました。引き続きご支援をお願い申し上げます。

【名簿購入代金・終身会費のお支払い、ご寄付の受付】

口座番号 009401179043

加入者名 大阪大学文学部・文学研究科同窓会

*お手数ですが、通信欄に①卒業修了年、②専攻専修名をご記入下さい。

●お願い

◆住所変更について

住所変更・勤務先変更等ございましたら、必ず同窓会事務局までご一報下さい。名簿への住所、電話番号等の記載拒否を希望される場合は、その旨あわせてお知らせ下さい。皆様のご協力をよろしくお願い申し上げます。

●大阪大学文学部・文学研究科同窓会

◆会長 長玉井 暉（S四四卒）

◆副会長 村田 路人（S五二卒）

◆澤田 有紀（S六〇卒）

服部 典之（S五六卒）

◆事務局メンバー

事務局長 舟場 保之（S六一卒）

総務 高木 千恵（H一〇卒）

企画 田口宏二朗（H六卒）

広報 鈴木 暁世（H一二卒）

事務局補佐 米田 恵（R二修）

田中 英理（H一〇卒）

中尾 薫（H一五修）

住所：〒560-0852 豊中市待兼山町「番五号」

ホームページアドレス：<https://www.let.osaka-u.ac.jp/dousou/>

事務局メールアドレス：dousoukai@let.osaka-u.ac.jp